後ステロイドの使用により皮膚症状は軽快している.

21. 蛍光分析によるセレン（Se）測定法とその臨床的意義

中西　明子

セレン（selenium）は，生体に必須な微量元素である．各種担癌患者において血中セレン濃度の低下が認められることより癌発生との関連が示唆されるなど，最近，微量元素に対する関心が高まるとともに，その臨床的意義が注目されている．教室においても，血清中のセレン濃度を簡便に測定することにより，その臨床的意義を検討している.現在行っている検討項目は，1．担癌患者における腫瘍マーカーとしての可能性，2．炎症性腸疾患におけるセレンの役割，3．長期静脈栄養実施に伴うセレン欠乏症の予防等について，研究を行っている.

対象は，各種癌患者，在宅IVH施行者，長期経口摂取不能者，炎症性腸疾患患者である．また，現在一般に認められている正常値がないため，良性疾患患者，健常ボランテアを用いてその正常範囲の決定を行っている.

方法としては，原子吸光法，蛍光法，比色法などがある．現在まで前2法での測定を試みたが精度と簡便さを考慮して蛍光法を採用し測定を続けている.

その測定結果より，1．正常範囲の決定，2．各種疾患における濃度，3．在宅IVH患者の静脈投与における動態等について，若干の結果を得たので報告する.

22. 大腸癌の肝転移予知ファクターとしてのLaminin の意義

斉藤　登

ラミニンは基底膜に存在する分子量80～100万の糖蛋白で，癌の浸潤や転移に関与するといわれる．大腸癌の肝転移機序を解明するためラミニンの動態を血清学的および病理学的側面よりアプローチしている.

血清ラミニン濃度は術前の患者血清をラミニンP1キットを用い，RIA法にて測定した．これまで80例を測定し，そのうち40例につきCEA, CA19-9, CA125と比較検討した．診断率ではCEAに匹敵し，肝転移におけるラミニン陽性率はsensitivity 86%という成績であった．一方，組織ラミニン染色は術直後の標本を凍結切片，エタノール固定，ホルマリン固定の3方法で酵素抗体法を用いて染色している．現在，凍結切片のものが最も良好に染まり，原発巣と浸潤巣に分け染色される程度を5段階に分類し血清濃度と合わせ評価，検討している.

以上より血清ラミニン濃度測定と組織ラミニン染色を用い，ラミニンの肝転移予知能に関する研究成果を報告する.

23. 経口腸管洗浄液による注腸二重造影検査の新しい前処置法

宮崎　要

注腸二重造影検査の新しい前処置法を開発する目的で外来患者600例を対象として臨床研究を行なった．まずPEG-ELS（Golytely），各種下剤，低残渣食を組み合わせた14の方法を設定し，そのうち最も優れた前処置法を決定した．ついで同方法と従来のBrown変法とを無作為化臨床試験を用いて比較検討した.

結果：1．14の方法のうちPEG-ELS 3,000ml，ラキソベロン10ml，ボンコロン食を組み合わせたGLB法が最も優れていた．2．無作為化臨床試験ではGLB法がBrown変法により優れた前処置効果を認めた（$p<0.001$）．3．特にGLB法は下行結腸，S状結腸直腸において腸管洗浄効果，総合診断能力がBrown変法より優れており，mucosal coatingは同等であった.

以上より，GLB法は注腸二重造影検査の優れた前処置法であると考えられた.

24. 術後合併症発生率から見た術前術後栄養管理の役割

（朝霞台中央病院　外科）金　英宇

1988年9月より1989年8月までの間に，待機手術を目的として，当科に入院した胃癌，大腸癌，直腸癌患者に対して，術前の栄養管理が術後の合併症の発生率に対して関与するか否かについて検討した.

術前にIVHを7日間以上受けたもの，4日間未満のもの，術前にIVHを受けていないものの3群に分けて，それぞれパラメーターとして，体重，握力，上腕周囲長，三頭筋周囲皮膚厚，一般血液生化学検査，トランスフェリン，プレアルブミン，レチノール結合蛋白，C3，遅延型アレルギー反応を入院時，手術前日，手術後2週間目に測定した.

その結果術前に7日間以上の栄養管理を行った群に，明らかに感染性の合併症発生率が少なかったので，各パラメーターとを比較検討し報告する.

25. ヌードマウス転移モデル作製とCTL移入による効果

三橋　牧

50歳，男性胃癌患者の転移リンパ節よりヌードマウス可移植性cell lineを樹立し，その性状について検討した．産生する腫瘍マーカーは，臨床所見と一致し，

CEA 陽性，CA19-9陽性，AFP 陰性であり，ヌードマウスへの生着率は6例中6例で100%であった．

この cell line を用い，CTL 移入による効果を観察する目的で，転移モデル作製を試みた．現在まで尾静脈より静注，脾臓への局注腹腔内投与を行ない，2週後に検索したが，転移形成はみられなかった．今後，移入する癌細胞数を増加させるとともに上腸間膜静脈より直接注入するなど方法を改善する必要がある．

また，誘導された CTL を背皮下移植腫瘍に対して投与し，拒絶の有無，浸潤するリンパ球のサブセットを免疫化学，組織染色により分析する予定である．

26．胃癌患者に対するレンチナン術前投与による免疫応答の検討

堀江　良彰

我々は，胃癌患者に対し，レンチナンを術前に投与し，インターロイキン2産生能，NK 活性，PHA 幼若化率，ツ反等を調べている．また，小野寺の栄養指数，腫瘍マーカー，リンパ球表面抗原についても検討している．

特に NK 活性は，レンチナン投与により上昇し，術後1週間目で低下した．術後の投与により2週間目に上昇したものがあったが，却って低下したものもあった．これらの解析が現在進行中であるが，初期の頃24時間測定法にて検査していた頃と比べると現在の12時間測定法ではばらつきが少なくなっているので，測定誤差に対する考察が必要である．また，不幸な転帰を辿った症例では免疫能も低下していた．今後症例を重ねて予後，ステージとの関連も検討する予定である．

27．右主気管支断裂の治療に関する実験的研究

笠井　恵

右主気管支断裂の緊急時の治療は呼吸循環動態の管理に主眼がおかれるが，最終的にはできるだけ右肺を温存したい．そこで右主気管支遮断犬を作製し1週間後に再開通させるモデルについて検討した．

1．PO_2は遮断直後より低下し1週間ほぼ同じ値をとったが再開通後は2日目で遮断前値に回復した．2．PCO_2はこの間ほぼ同じ値であった．3．肉眼的には遮断により肝様肺となるが再開通2日目には健側と著変を認めなかった．4．病理組織学的には胸膜の変化が主で実質には左右の肺に差が少なく，右肺の変化が可逆的なものであると考えられた．5．遮断側肺と健側肺の CMX 組織移行濃度に差はなく，抗菌力を期待できる値であった．

以上より，右主気管支断裂に対しての緊急処置は気管支遮断だけにとどめ，患者の状態の改善を待って，待期的に気管支形成術を行えば良いと考えられた．

28．超音波検査を用いたS状結腸・直腸癌のリンパ節転移の検討

（大分アルメイダ病院　外科）進藤　廣成

【目的】直腸癌リンパ節転移は，術前の検査では診断不可能に近いのが現状である．著者は超音波検査により，リンパ節描出の可能性を検討中であるので，その成果を報告する．

【方法と対象】検査は仰臥位にて施行する．大動脈を描出し，まず IMA を描出する．これを下方にたどり，総腸骨動脈，内外腸骨動脈，外腸骨静脈を描出した．側方向は術中超音波検査により位置関係を確認した．症例は1988年1月以降に手術された直腸癌症例35例(術中超音波は20例に施行)，S 状結腸癌20例である．

【成績】各リンパ節の診断率をみると，sensitivity は IMA：100%，総腸骨動脈周囲：100%，内外腸骨動脈周囲：100%，positive predictive value は IMA：60%，総腸骨動脈周囲：100%，外腸骨動脈周囲：50%，内腸骨動脈周囲：75%であった．以上，現状における成績を述べると共に，代表例を紹介する．

29．転移性肝癌に対するエタノール局注療法

（中野江古田病院　外科）神崎　博

最近では転移性肝癌に対して肝切除や塞栓療法が行なわれ良い成績が示されている．しかしこれらの治療法の非適応例も多く，これらに対する治療法はまだ確立されたとはいい難い．一方，原発性肝癌に対するエタノール局注療法の有効性が報告されているが転移性肝癌に対する報告は少ない．

そこでわれわれは転移性性癌に対する局注療法を1989年1月より試みた．現在までに大腸癌肝転移例4例，胃癌肝転移例2例に対して本療法を行なっている．方法はすでに諸家により報告されている原発性肝癌にたいするエタノール局注療法に準ずるが，被膜がないこと，多発することなど異なるところがあり症例により工夫が必要と思われた．まだ日が浅いため症例も少なく効果判定にまでは至らないが今後ますます症例を重ねていきたいと思う．

30．非触知乳腺腫瘍の超音波診断に関する研究

（聖隷浜松病院　外科）神尾　孝子

従来，非触知乳癌は乳頭異常分泌あるいは mammography における石灰化像から発見されていたが，その発見頻度は低く全乳癌症例に占める比率は0.68～4.4%に過ぎない．しかしながら乳腺超音波診断